

社団法人私立大学情報教育協会
平成 21 年度 第 2 回 歯学教育 FD/IT 活用研究委員会記録

- I. 日 時:2009 年 9 月 24 日(木) 午後 5 時～午後 7 時
- II. 場 所:私立大学情報教育協会事務局会議室
- III. 出席者:神原委員長、松久保委員、岡本委員、藤井アドバイザー
井端事務局長、森下主幹、恩田

配布資料

- 1. 名簿
- 2. Profile and competences for the European dentist
- 3. 参考資料

IV. 検討事項

1. 前回の委員会ではアメリカのコンピテンシーについて議論したため、今回は片岡委員にヨーロッパのコンピテンシーについて説明をしていただくことになっていたが、急遽ご欠席のため、資料をもとに全体で議論することとなった。ヨーロッパのコンピテンシーの内容としては、ヨーロッパにおける歯科医に必要な能力について書かれており、全体的にはアメリカのコンピテンシーとあまり変わらないが、かなり詳しく書かれている。各ドメインでプロフェッショナルリズム、コミュニケーションスキルなど 7 つの項目のメジャーコンピテンスとサポーティングコンピテンスに分かれており、アメリカ、日本の国家試験と比較すると、将来の歯科医師像として広範囲で、かつ多様性の持った歯科医師を理想としている。日本との大きな違いは、海外のものは基礎部分が多くはあまり詳しくは述べられていないが、日本は基礎部分が多く記載されており、重要視されている点である。委員会では、病理学、薬理学は臨床で行ったほうが効果的であり、かつ歯科医は薬剤師とコミュニケーションが取れる程度の知識で十分であり、同等の知識を与えるには多すぎる。それよりは患者との接し方や倫理観などの他の能力を身につけて欲しい。歯科においては、診断のための資料は可視の部分が殆どであり、メディカルと比較すると 1000 分の 1 ほどしかないため、現在の日本の歯科医療に足りないのは、診断治療計画であるとの意見があった。

この現状を改善するためには、今あるヨーロッパ、アメリカ、日本のコンピテンシーを合わせて独自のコンピテンシーを作成し、現在の歯学教育を大きく変えていく必要があるとの結論に達した。しかし、海外の分類を日本にそのまま当てはめても良いのか？国家試験、コアカリキュラムとはかけ離れているものにしたほうが良いのかなどの問題点もあるため、まずは、委員で分担して、ヨーロッパのコンピテンシーを翻訳後、新しい歯科医師に必要な能力を検討し、日本版のコンピテンシーを 10 月末までに作成することとなった。下記に日本版プロフィールを記す。赤字部分は、現在日本の歯学教育に欠けている部分であり、年度末にはこれを解決する教員

の教育力を再構築していくこととなった。

日本版のプロファイル

TABLE1 今後卒業するヨーロッパの歯科医師像は次のようであればならない

1. 幅広い教養と歯科の教育を履修し、あらゆる歯科医療ができる。
2. 歯科医学の科学的知識を十分に兼ね備えている。
3. 医療と福祉の現場において、歯科衛生士および歯科技工士や医療・福祉の専門家と連携でき、好ましいコミュニケーションをとることができる。
4. 生涯にわたって持続可能な専門知識を高めることができる。(1-4)
5. 基礎的、理論的かつ実践的技術を駆使し、問題解決に向け、幅広いエビデンスに基づく歯科医療(EBD)を行うことができる。

V. 次回委員会の予定 平成 21 年 11 月 27 日(金) 午後 5 時～午後 7 時